

撮り臨病的に IPLN と診断した例は男 62 例女 4 例計 66 例 83 個であった。これがすべて IPLN であるという確証は全くない。

【結語】努力目標としては、IPLN は 1 回は HRCT を撮影し診断をおこない、その後は調査対象から外すことである。そのためには可能な限り現状で診断をおこない、経過観察により経験例や、切除症例を増加することにより知識を正確にしていくしかないと思われる。

## 5 肺腺癌の radiological - mathematical correlation ～野口分類間の移行の検討～

古泉 直也・石川 浩志・森田 哲郎  
谷 由子・奥泉 美奈・斎藤 友雄  
笹井 啓資・菅野 敬祐\*・児玉 直樹\*\*  
福本 一朗\*\*

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
腫瘍放射線医学分野  
北里大学保健衛生専門学院\*  
長岡科学技術大学情報・制御工学  
専攻\*\*

肺腺癌の初期状態を SIZE RANKING 法と一次関数的増大モデル（拡散方程式モデル）を用い、野口分類 Type A 肺腺癌 53 病変、Type B・C 肺腺癌 72 病変について、移行の数学的検討をおこなった。10mm 以下では Type A 以外からの Type BC への移行、すなわち、癒痕癌等の存在が疑われた。11mm 以上で Type A 内の癒痕の出現、Type BC の非すりガラス病変変化が示唆された。

## 6 高分解能 CT 上の肺野限局性すりガラス病変 ～当科での対処法と経過観察例の検討～

谷 由子・古泉 直也・石川 浩志  
森田 哲郎・根本 健夫・笹井 啓資  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
腫瘍放射線医学分野

数年来当科の胸部外来では GGO 全例を精査または経過観察する方針で、縮小がなければ経過観察を継続している。2002 年度の同外来での高分解能 CT 上 GGO を認めた 80 症例を対象に検討を

行った。経過中増大を認めた 7 病変のうち最小のものは初回 CT で 8mm であり、7mm 以下の病変では経過観察間隔を延長できる可能性がある。2 例の高濃度のない GGO 増大例があり 1 例は比較的短期間で増大であった。逆に高濃度を伴う GGO の緩徐な増大例もあり、高濃度の有無で増大速度を予測するのは困難と考えられた。切除例 17 例のうち 8 例が多発例、7 例が術後残存病変があり、2 例は 2 回目の切除術を施行した。今後も経過観察例の増加は避けられず、間隔延長による効率化の可能性はあるものの、経時変化以外の質的評価法の確立が待たれる。

## 7 側脳室腫瘍の 1 例

大島 将之・竹内 茂和・谷口 禎規  
大野 秀子・伊藤 寿介\*  
厚生連長岡中央総合病院脳神経外科  
三之町病院神経画像診断センター\*

症例は 57 歳、男性。交通事故にて、当科初診し、incidental に左側脳室腫瘍を認めた。CT 上は、石灰化と思われる high density mass で、一部に造影剤増強効果を認めた。MRI 上は、T1WI にて low ~ iso intensity, T2WI にて iso ~ high intensity であり、heterogeneous に増強効果を認めた。choroid plexus と septum pellucidum に接しているが、発生母地か否かは、はっきりしなかった。画像所見からは、intraventricular meningioma または central neurocytoma が疑われた。intraventricular meningioma としては、その局在や増強効果、central neurocytoma としては、その年齢や CT 所見が atypical な所見と考えられた。

## 8 稀な形態、走行を示した A1 の動脈瘤に対し GDC 塞栓術を行った 1 例

阿部 博史・渡邊 秀明・遠藤 浩志  
立川総合病院循環器・脳血管センター  
脳神経外科

前大脳動脈 A1 部が蛇行、coiling する異常走行を示し、その部に動脈瘤と fenestration を合併す